

特集

冬対策（冬のどうぶつと動物園）



日本には約100の動物園がありますが、冬季閉園するのは、東北と北海道の限られた動物園だけです。秋田市大森山動物園もその中の一つです。閉園中、飼育係の人達は都会へ出稼ぎに行って、動物の餌代を稼いで来るとか、いろいろな噂がまことしやかにささやかれています。冬の生活の本当のところを、この際はっきりさせておきましょう。

— 獣医師 三浦匡哉 —

どうぶつ達の冬対策

まず、厳しい冬を越すために、動物達がどんな工夫をしているか見てみましょう。大森山動物園には北国出身など寒さのスペシャリスト達が結構います。

天然の毛皮やダウンジャケットを着る



▲毛に覆われたトナカイの鼻

トナカイ・アメリカビーバー・シロイワヤギ・ユキヒョウ・カリフォルニアアシカなど寒帯や高山帯、冷たい水の中に住む動物は夏に比べると冬の毛は密に生えています。きわめて密な下毛の上に、長く艶のある上毛が生え、その中に空気の間層を作って、体から熱が出ていくのを防いでいます。また、トナカイでは鼻先や蹄の間まで毛に覆われていたり、ユキヒョウでは足を寒さから保護し、軟らかな雪の上でも潜りやすくするために、足の裏を毛のクッションで覆い、接地面積を大きくするなどの工夫をしています。



▲ユキヒョウの足の裏

水鳥にはとてもたくさんの羽が生えていて、まさにダウンジャケットを着ています。外側の羽の下で、皮膚に近いところには、タンポポの綿毛のような綿羽（ダウン）が、主に胸～腹部に多く生えています。この綿羽が空気をたっぷり含み、寒さを防ぎます。尾腺からは油成分が分泌され、水鳥はこれを嘴で全身の羽に塗りつけ、防水や保温効果を高めます。

お相撲さんもビックリ

アシカやクマなどでは、栄養のあるものをたくさん食べ、厚い皮下脂肪を蓄えることで寒さが体の中まで伝わらないようになっています。

体温のマジシャン

ラクダには、他の動物と違い、体温を35～41℃まで自在に変化できる特殊な能力があります。このため、寒い時は体温を下げ、暑い時は体温を上げることができるので、寒くても暑くても活動することができます。もちろん、ふかふかの毛も寒さを和らげています。

チームワークで乗り切るよ

サル山のニホンザルたちは、寒くなるとみんなで押しくらまんじゅうをしたり、少しでも冷たい風の来ないところにかたまりじっとしています。



▲寒さに耐えるニホンザル

冬眠と冬ごもり

爬虫類や両生類は、気温が下がると体温も下がり、活動量、代謝量も減って、動けなくなります。そこで、安全な場所に身を隠して、冬の間じっとしています。冬眠中は、体に蓄えた栄養を使って生きていて、酸素呼吸をしなくても大丈夫だといわれています。

リス、ヤマネ、コウモリなど、冬眠する哺乳動物は小型のものが多く、秋の頃から食物をたくさん食べたり、巣穴に餌を溜めこんだりして冬に備えます。外気温が低下してくると、安全な巣穴の中で、体温を自ら下げ始め、外気温近くまで体温が下がります。